

1.予感



エストリスはドワーフの父とエルフの母の間に生まれた混血児である。三千数百年ほど前のドワチャッカ大陸で生まれた。人の心のすさんだ時代だった。ドルワーム、ウルベア、ガテリアなどの大国が相争う戦乱の時代に入りつつあったからである。エストリスは非常に珍しい、両方の親の外見の形質を受け継いだ子供だった。その奇妙な風貌は、異分子としてどの国からも受け入れられず、迫害された。両親は懸命に彼を守ろうとしたが、そんな時代に子を成してしまったことをずっと苦悩してもいた。望まれて生まれたと知りつつも、両親を苦しめる自分自身という矛盾は、エストリスの原罪として、彼の心の居場所を奪った。やがて戦乱の中で両親は命を落とし、彼は天涯孤独となった。どうであれ、生きなければならなかった。盗みや乞食のようなまねもしたし、下劣な趣味を持つ貴族にとりいるために色目を使ったりもした。それは屈辱的なことだったが、心の置き場所がない彼にとっては奇妙な安らぎを感じる体験でもあった。そしてそう感じる自分の心がまた好きにもなれず……そんな複雑さがエストリスの思春期だった。異なる種族の血が混じることになんらかの作用があったのか、彼には特異な魔術の才能があり、長じて研究者として帝国に招聘された。戦争が激しくなりつつあり、出自はどうあれ能力のあるものが求められたのである。彼はそこに自らの居場所を見出そうとし、自身を疎んだ世界を見返すように、兵器や戦争のための魔術を開発していった。



そのような状況だったため、他にもたくさんの変わり者の研究者が招かれていた。とくに、死と眠りの意識の違いを証明できず、何年も不眠で不死の研究に没頭し続けているオーガの死霊使いソフィヌ、研究の障りとなる自らの倫理観を克服するために、自身の脳を改造してしまったブクリボの工学者ブラクゥ、そして純粋な清廉足りえない人の心に絶望し、植物を偏愛するようになったウェディの女性アピーらとはウマが合い、研究を共にすることとなった。彼らの研究は抜群の戦果を生んだが、あまりにも人倫を逸脱したその研究姿勢から次第に周りから疎まれるようになった。特にガテリアの第二都市ハルバイを焼き尽くした「復讐の月<イシュ・ヤンカル>」はそれを使った時の皇帝からすら畏れられ、粛清の機運が高まっていった。単に排斥するだけでは、敵方につかれる可能性があったからである。そのような身勝手さに4人は辟易としていたが、すでに彼らは自衛のために幾重にも手を打っていた。エストリスなどは因果にすら干渉し、殺された瞬間にそれが自らの身代わりの人形「だったこと」にして死を免れるという高度な呪法を自らと人形に施して、ほとんど殺害するのが不可能な状態だった。しかし、手詰まりな状況の中で、二人の新任の研究者が彼らの前に立ちふさがった。時空にまつわる研究を行っていたその少年と少女は、行き先を制御できないまでも、研究施設を運営する膨大なエネルギーを利用して時空の裂け目を生み出し、そこから彼らを放逐することによって、結果としてその時代から抹殺することにからくも成功したのである。その功績は、のちに少女を研究所の筆頭研究員に、少年を帝国の宰相にまで出世させていきかけの一つとなったのだが、それはエストリスたちとは関係のない、また別の物語である。

どれほどの間時空の狭間を漂っていたのか、一瞬のような、無限に引き延ばされたような奇妙な時間間隔の中に、いつしか意識が薄く引き伸ばされ、溶け出していくかとも思われた頃、どこからともなく声をかけてくるものがあった。

それは自らを太古龍レムナスと名乗り、魔族の体を与え時空の狭間から引き揚げるなど、研究を継続するいくつかのお膳立てをすることと引き換えに、その研究成果を自らの願いのために役立てるように交渉してきた。

その願いに共鳴した4人は提案を受け入れ、3000年の時を超えてアストルティアに帰還することとなったのである。

そして現在、計画は最終段階に入っている。

アピーは指先につまんだ小さな種を見つめていた。後はこれを植えて少し水をやれば、彼女が担当する献義体も完成する。そうなれば彼女たちの今の主<悪夢龍レムナス>の「仮面」の野望が成就するまであと一歩となる。それは同時に、彼女たち4人の魔博士の復讐や、解放や、探求や、悲願が成就することでもあった。何百年も答えを探して苦悩し、今の主に出会うことによって、ようやくたどり着いた自らの生きた証……。彼女が果たすべき仕事はもはや残り少ない。だが今はまだ、じっとその種を見つめ続けているだけである。

続く

